

6月総評 西躰 かずよし

今月は作品のなかに謎が感じられるものに惹かれました。
気になった作品についていくつかふれてみたいと思います。

たんぽぽに蝶

風にゆられて

シーソーしてる

桜咲

たんぽぽに蝶がとまっているところがシーソーしているように見えたのですね。飾り気のない表現に惹かれます。私事ですが、なぜ口語なのかと聞かれた場合、「完成度とより多くの読み手にことばが開かれていること」を天秤に掛けた場合、私は後者をとるからと答えます。心情からことばまでの距離の短さ、口語ならではの良さが作品から感じられます。

しろいらくだのゆめをみる

春町 美月

しろいらくだのゆめってどんなゆめなんだろうと読み手をちいさな謎に引き込みます。ひらがな表記は作為的なように見えますが、余分な言葉を省いたことで問題は解消され、謎がより効果的なものになっているように感じます。

あの頃から名前を

呼ばれた気がした

納豆にカラシを足したところで

青野 椰栄

「名前を」で行替えすることで、次の展開を期待させます。そしてあの頃という時間から名前を呼ばれるという次の展開についても説得力があります。さいごの納豆以下の一節は一気に読者を作中の表現主体の生活しているところへと誘い込むような効果をもたらしています。

寒村が

チョコレートからあふれ出す

暮田 真名

チョコレートから寒村があふれ出す理由は謎です。寒村はチョコレートを食べたときに思い出す古里という意味にもとれます。もしそのまま書けば「ふるさとが/チョコレートからあふれだす」となり、チョコレートのCMみたいになります。そうは書かず寒村という

言葉を使用したところに、作者の心情を垣間見ます。

純白の躑躅ばかりが植えられて
病院へ続く道の静けさ 桜望子

ふとした光景が作者や読み手にとって重要となる瞬間がありますが、たとえば俳句の写生という方法はそれを活用したものと思われまふ。でもなぜその光景が読み手にとって重要となるのかは、書き手と読者の関係に委ねられています。ユトリロの絵にどうしようもない感動を覚えるのは、それを見ているものにおいて単なる風景を飛び越えたものになるからで、この作品の静けさのなかにはそうしたものが感じられます。

梅雨の星
キリンの濡れた目のなかに 細村 星一郎

たとえば1行書きにすると「キリンの濡れた目のなかに梅雨の星」となりますが、これでは梅雨の星からはじまることによって生まれる「なぜ梅雨なのに星が見えるの？」という驚きが、読者に生まれません。また、「目の中に」で終わることで涙に濡れているキリンの目に星を置くようなそんな印象が残ります。梅雨の星は悲しんでいるキリンへの贈り物のようにも思えます。

海を知らぬ子の墓に浮輪をおいて 亀山こうき

同じく「海を知らぬ」ではじまる歌に寺山修司の「海を知らぬ少女の前に麦帽子のわれは両手を広げていたり」というのがありますが、海を知らぬというのが無辜のたましいを表しているという意味では共通しているように思います。そこから作者の物語ははじまる訳ですが、墓に浮輪をおくという行為は、鎮魂のそれといってもいいかもしれません。

ガードレールとカーブミラーは
根っこが同じで
カーブミラーだけ夜に投身する 治川敦也

「ガードレールとカーブミラーは/根っこが同じで」という導入において、そうだったかなと考えさせられますが、行替えの後に「カーブミラーだけ夜に投身する」というフレーズ

が突然来ます。根っこが同じなのに片方のみが投身するという点や「投身」という強い言葉から乾いた喪失感が伝わってきます。

ママ、おんぶして

って母が泣いて言うから

私は母をおんぶする

うすしか

こうした作品は、表現された特殊な状況が読者にリアルなものとして伝わるかどうかは成功の鍵を握りますが、感情の吐露を排除して事実の描写にのみ徹したことによって説得力のある作品に仕上がっています。